
空

アキ × 美波

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空

【Nコード】

N13030

【作者名】

アキ×美波

【あらすじ】

主人公・田村清史は空を撮ることが趣味である。ただ、周りには空の素晴らしさをわかってもらえない…。そんな時、清史に1人の女の子がやってきた。

（前書き）

空って何か不思議ですよね…。

短い作品ですが、最後まで読んでもらえたら嬉しいです。

青い空・夕焼けの空・夜の空…いろんな顔を見せてくれる空が俺は好きだ。俺は田村清史^{たむらきよし}。趣味は空を写真で撮ることだ。いつでも空の顔を写真に残せるように毎日、カメラを持ち歩いている。そんな俺を見て、周りは『変だ』と言う。俺からしたら、あんなに素晴らしい空をカメラに撮らないなんて周りの方が変だ。でも俺が周りの人、全員が変だと思ってたのは1ヶ月前まで。ちょうど1ヶ月前、俺は1人の女の子に出会った。

「いつもカメラを持っていますよね？何してるんですか？」

彼女は俺を見るなり、そう言ってきた。俺は『またか』と思った。

「君、名前は？」

「秋山葵^{あきやまあおい}です！」

「葵、君は空をどう思う？」

この質問をすると、たいていの人は『別に。特には何も思わないけど？』と言う。俺は、それが許せない。

「空ですか…特別、何かを考えたことは無いですけど…時々、綺麗な空って思います！」

おっ… 葵は空を綺麗と言ったな。これは空の素晴らしさがわかってもらえるかもしれん…

「そうか。俺は、このカメラで空の顔を撮っているんだ」

「空の顔ですか？」

「そう。空の顔だ。空は毎日、違うだろ？だから毎日、表情が違っ
んだよ。さらに昼間・夕方・夜と時間によっても色が変わる。これ
も空の顔・表情が変わっているんだ」

一気に説明してみたが… 葵はポカンとしている。まあ普通は理解
できないだろうな。

「要するに俺はカメラで空を撮るのが好きなんだ。変な趣味だろ？」

いつも変だと言われるので葵には先に自分から『変』と言ってお
く。その方が傷つかないしな。

「私は… 変だとは思いません」

「へっ？」

俺は一瞬、自分の耳を疑った。変だと思わないだと？確かに葵に
は周りとは何か違うものを感じていたが…

「だから、私は変だと思いません。空を写真に撮って、何か悪いこ
とでもあるんですか？」

葵は今までにない反応を見せた。いつも周りは俺の趣味を否定し
てきた。だが、葵は違う。

「俺は常にこのカメラを持ち歩いてるんだぞ！周りは俺のことを『

変だ』と言ってきた！！それなのにお前は何故、俺のことを『変だ』
と思わずにいられるんだ！」

俺は、ついカツとなって大きな声をあげて怒鳴ってしまった。葵
は何もしていないのに…俺は最低だ。

「空…見上げると綺麗ですよね…」

葵が呟く。俺は葵をずっと見つめていた。

「ああ。そうだな」

俺もそう呟く。それから俺と葵は、お互い話を切り出せなかった。

それから10分くらいが経っただろうか、葵は相変わらず下を向
いたままだ。

「葵…！」

俺は大きな声で名前を呼ぶ。葵だからこそできる頼みごとをする
つもりだ。

「は…はい！何ですか？」

葵はビックリした様子で返事をした。俺は、ひとつ深呼吸をして…

「俺は、お前と空の写真を一緒に撮りたい！よかったら、一緒に空の顔を撮らないか？」

と、葵にお願いをした。こんなことを頼むのは、もちろん初めてのことである。

「……………」

葵からの返事が返ってこない。やっぱり無理か…そう俺が思っている…

「私は特別、空が好きなのはありません。でも…空の顔を撮ってみたいという気持ちがあります。なので…私も空の顔を撮りたいです！…」

こうして、俺は葵と一緒に空の顔を撮ることになった。

それから1ヶ月、俺と葵は毎日のように空の顔をカメラで撮った。

「清史、あつちの空も綺麗だよ」

「あ…葵！ちよっと待って」

「もお、早くしてってば。空の顔が変わっちゃっよ」

「わかってるって」

いつもこんな調子だが、葵といる時間がすごく楽しい。前は1人で撮ってたから、寂しかったが、今は葵と一緒にいてくれる。まだ俺と葵は周りの人に『変だ』と言われることが多いが、俺は葵がいてくれるだけで充分だ。

「清史、空の顔を撮るって楽しいね!」

「そうだな。人生で一番、楽しいかもな」

「それは、ちよつと言い過ぎじゃないの?」

空…毎日、違う顔を見せてくれる、不思議な存在…俺は、そんな空のことが大好きだ。葵と出会えたきっかけも空だ。周りから見れば俺と葵は『変』かもしれない…でも、たとえ周りに理解されなくたって…

「清史!一生、一緒に空の顔を撮ろうね!」

満面の笑みで葵が言う。

「葵、俺にちゃんと付いてこいよ!」

敢^あえてもう一度、言おう。俺は空のことが大好きだ。

（後書き）

僕自身は空が好きです。時々、夕焼けとかをカメラで撮ることができます。

最後まで読んでくださってありがとうございます。感想や評価、待っています！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1303o/>

空

2010年10月30日19時37分発行